

Title	大学英語リメディアル教育における方法論
Author(s)	山岡, 華菜子
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/26272">https://hdl.handle.net/11094/26272</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

〔 題 名 〕 大学英語リメディアル教育における方法論

学位申請者 山岡華菜子 印

少子化に伴い大学入試の多様化が加速し(桃井ほか, 2009)、結果として日本におけるリメディアル教育は数多くの教育現場で注目されるようになってきた。しかし、未だ長期的な視座に立って実践を積み重ね、英語リメディアル教育における効果的な実践の理論的な枠組みを探り提示している研究はほとんど見られない。そこで、本稿では3年間の英語リメディアル教育実践をまとめ、先行研究で明らかにされてきた効果的な実践事例を検討しながら、Richards & Rodgers (1982)で提唱された「アプローチ(Approach)、デザイン(Design)、プロシージャー(Procedure)」の理論枠組みを用い、英語リメディアル教育の教授法を考察する。本博士論文の研究方法としては日野(2007, p.9)の「実践報告の積み重ねから、望ましい教育方法」を浮かび上がらせる過程のひとつと位置づける。

Richards & Rodgers (1982)で提唱された英語教育の理論枠組みの詳細を以下に示す。

アプローチ：言語と言語学習の理論、信念、前提

デザイン：言語学的内容の定義、内容の選択とその構成のための詳細な記述、教師・学習者・教材の役割の記述

- 1) インストラクションの内容；シラバスなど
- 2) そのシステムの中での学習者の役割
- 3) そのシステムの中での教師の役割
- 4) 教材の種類と機能

プロシージャー：メソッドにおけるテクニックや実践に関すること

日本の英語リメディアル教育の先行研究を概観し、次の9つの原理が抽出された。「ア. 単語・文法など基礎的要素の形成的評価を用いた定着」「イ. 効果的教科書作成の取り組み」「ウ. 学習意欲向上・継続のためのフィードバックの重要性」「エ. 学生の取り組んだものへの学生自身による振り返り」「オ. 日本語を使用したタスク中心の英語教育」「カ. オーセンティック教材の部分的使用」「キ. 適切な指導の下の内容重視の言語教育」「ク. 各々の学習速度に沿って進む授業・教材」「ケ. 簡単な協働学習」。これらの原理と本稿において効果的であるという傾向が見られたものを照合しながら、効果的な英語リメディアル教育の方法論を探る。

実践を行うにあたり本研究で採用する理論的枠組みとしては、Richards & Lockhart (1994)とRichards(1995)で述べられているリフレクティブ・ティーチングのアプローチの一つであるアクションリサーチ(以下AR)に基づき実践を積み重ねる。ARの方法は研究者により多岐にわたるが、本稿で採用するARの手順は、Richards & Lockhart (1994)による、「計画立案(Planning)、アクション(Action)、観察(Observation)、省察(Reflection)」(p.12)のつとる。

本稿の実践に参加した学習者は関西の私立大学に通う大学生である。博士論文の3章から5章までの報告では2010年度から2011年度までの実践に各学期平均約132名の学習者が参加し、2012年度は各学期平均約96名の学生が参加した。また6章では2名の教員による観察と2名の教員の授業を観察して得られた結果をまとめた。扱ったデータは主に学期末に実施した質問紙と、2012年度に関してはインタビューデータを用いる。データの分析方法は、質的手法を採用し、主にCorbin&Strauss(1990)を下に発展させた戈木クレイグヒル(2005,2008)で提唱されているグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を援用して行った。さらに、Berelson(1957)により集約された内容分析も用いた。

博士論文では3年間の実践をインプットとアウトプットの2部に分類しまとめた。インプットでは効果的であると思われる様々な実践を実施し、多角的なアプローチを試みた。そしてその結果から特に効果があると示唆されたオーセンティック教材の使用を中心に実践を重ねた。次にアウトプットに関してであるが、日野(2003)と山岡(2011)において提案された英作文を用いて行った。

インプットの側面からは、英語リメディアル教育でもオーセンティック教材を用いて授業実践を行うことが効果的であるという示唆が得られた。また、学習者の学力よりもさらに低いと思われるレベルの教材を使用することが英語リメディアル教育実践においても有効である傾向が見られた。アウトプットの側面については、Dörnyei (2001)で提示された、面白くて学習者を退屈させないタスクの特徴として挙げられている項目と照らし合わせながら英語リメディアル教育におけるタスクの重要な特徴を探った。結果としてDörnyei (2001)で提示されている特徴以外に、創造性と親しみやすさが英語リメディアルにおけるタスクの特徴として挙げられた。

先行研究と、本稿における実践研究で示唆された結果を比較したものを以下に示す。

先行研究から抽出された原理の中で、本研究からもその傾向が見られたものは、「ア. 単語・文法など基礎的要素の形成的評価を用いた定着」「ウ. 学習意欲向上・継続のためのフィードバックの重要性」「エ. 学生の取り組んだものへの学生自身による振り返り」「オ. 日本語を使用したタスク中心の英語教育」「カ. オーセンティック教材の部分的使用」「キ. 適切な指導の下の内容重視の言語教育」であった。次に、先行研究では抽出されたが、本研究からはその傾向がはっきりとは見られなかったものとして、「イ. 効果的教科書作成の取り組み」「ク. 各々の学習速度に沿って進む授業・教材」「ケ. 簡単な協働学習」が挙げられた。また、本実践研究から示唆されたことは、「1) オーセンティック教材の全面的な使用」「2) Graded Readers 付属の CD のリスニング」「3) 創造性・親しみやすさを持つタスク」「4) ESP 的要素を持つ教材使用の可能性」であった。さらに学生への姿勢として重要な要素である傾向が見られたものは、「5) 達成感と安心感を持たせる」「6) 積極的な褒めと励まし」であった。

上述の実践結果を踏まえ、博士論文の考察で「英語リメディアル教育におけるアプローチ・デザイン・プロシージャ」の提案を行った。以下にまとめて示す。

アプローチ：① ヴィゴツキーの最近接発達領域と足場作り理論 ② i-1 と理解可能なインプット

デザイン：

- 1) インストラクションの内容；シラバスなど：交渉シラバス
- 2) そのシステムの中での学習者の役割：学びなおす過程において新しい発見や気づきをし、学習意欲を持ち維持・継続し積極的に学習に参加する。
- 3) そのシステムの中での教師の役割：Glasser(1998)が選択心理学に基づき提唱した「①支援する ②励ます ③傾聴する ④受け入れる ⑤信頼する ⑥尊敬する ⑦意見の違いを交渉する」を学習者に対して実践する。
- 4) 教材の種類と機能：比較的易しいレベルの教材や、親しみやすい内容のもの、オーセンティックなもの、創造意欲を湧かせるものを使用し、必要に応じて中等教育において既習事項と思われる文法や文型、語彙などを学ぶ。

プロシージャ：教材の選定の際には、内容が長すぎず、難しくないものを選び、学習者にとって親しみやすいものかどうかを基準に選ぶ。教室や学習者の傾向性や、学習者との交渉などにより決定される。

今後の課題としては、博士論文において対象となった大学は非常に限られていたため、今後の実践においてはより多様な大学における英語リメディアル教育を扱い、より大規模な量的質的調査を行い、さらなる質的調査も併せて行うことである。

#### 引用文献

Glasser, W. (1998). *Choice theory: A new psychology of personal freedom*. Harper Perennial.

日野信行 (2007) 『『実験』ではなく『実践』を：英語教授法研究への姿勢』『言語文化共同研究プロジェクト 2006 『これからの言語文化教育』大阪大学大学院言語文化研究科』

Richards, J., & Lockhart, C. (1994). *Reflective Teaching in Second Language Classrooms*. Cambridge : Cambridge University Press.

Richards, J. C., & Rodgers, T. (1982). Method: Approach, design, and procedure. *Tesol Quarterly*, 16 (2), 153-168.

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 山 岡 華 菜 子 )			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	教授	日野 信行
	副 査	教授	岩根 久
	副 査	准教授	村上スミス アンドリュー
<b>論文審査の結果の要旨</b>			
<p>本論文は、今日のわが国の大学教育の現実における重要課題のひとつとしてのリメディアル教育、言い換えれば、大学に入学する者が本来備えているべき学力を有していない学生に対する補習の要素を持つ教育における、英語教育の方法論について、授業実践研究を中心に考察するものである。</p> <p>本論文の第1章ではまず、リメディアル教育の歴史及び背景を概観するとともに、先行研究を精査し、リメディアル教育について効果的であるところまで言われている方法論について、9点の原理を抽出している。従来、リメディアル教育の方法論について大局的に考察した論考は少ないため、意義深い分析となっている。</p> <p>第2章では、本論文の研究方法について述べている。本論文は、大学英語教育学会や日本リメディアル教育学会等で今日盛んになりつつある「授業学」の立場に拠る研究である。また、従来、教員個々の授業向上の手段として活用されてきたいわゆるAction Research の手法を学術研究に応用することに意義を認める視点に立っている。具体的には、Richards and Lockhart (1994) のReflective Teachingの提案に始まるJack C. Richardsの一連の英語授業研究や、その影響下にある日野(2007)等の「実践の積み重ねと実践報告の共有による授業法研究」などの観点を取り入れた研究である。教授法分析の枠組みとしては、Richards and Rodgers (1982) のApproach・Design・Procedureを採用し、体系的な分析を行っている。</p> <p>第3章から第6章は、授業実践とその分析について述べている。本人が大学において実践している英語リメディアル授業の記述、その受講生へのインタビューやアンケートの結果の分析、他の教員による当該授業の観察に基づくフィードバック、他の教員の授業の観察等である。得られたデータには、質的分析の手法であるGrounded Theory Approachを用いて分析を実施している。</p> <p>第7章では、本実践研究から得られる知見について、理論的分析をまじえて考察している。大学における英語リメディアル教育において示唆的なアプローチとして、たとえばKrashen (1985) のcomprehensible input (<math>i+1</math>)の考え方を挙げるとともに、さらにDay and Bamford (1998)の唱える <math>i-1</math>の視点を取り入れてインプットの調整をはかることを有益としている。その他の知見としては、たとえば、オーセンティック教材すなわち教科書でない生の素材はリメディアル教育では高度に過ぎるという通念が従来あるのだが、先行研究と本研究を併せて浮かび上がってくる事実として、大学における英語リメディアル教育ではオーセンティック教材を用いることは実は効果的であること等が論じられている。そして第8章では、本論文のまとめとともに、本研究の限界についても述べ、今後の研究への展望を示して締めくくっている。</p> <p>本人も述べているように、本論文にはいくつかの限界がある。特に、Action ResearchやReflective Teachingを基盤にした研究は、主観の介入する部分が多く、一般化しにくい面もあることは従来から指摘されている通りである。しかし本論文では、Grounded Theory Approach等の体系的なデータ分析の方法を用いてその欠点のある程度補うとともに、リメディアル教育や英語教授法に関する豊富な知識を活用して、説得力を持つ議論を構築することに、少なからず成功していると言える。近年の英語教育研究で注目される「授業学」における先駆的な意義を有する論文であると評価できる。また、わが国の大学教育の喫緊の課題に応える研究であり、大きな社会的貢献を期待できる。これらのことから、本論文は、3名の論文審査担当者全員から高い評価を得るに至った。</p> <p>以上のように、本論文を、博士(言語文化学)の学位論文として価値のあるものと認める。</p>			